

□Guild-XX (written by BLUE panda)

XX ギルドの面々は異色のキャリアを持つ。その全員が元官僚であり、かつては日本の頭脳として身を捧げる志しを持つ者達であった。

誠実に国民の事を思い日本を憂いた騎士達が何故国を裏切ったのか。…いや、彼らが国を裏切ったのではない。国が彼らを裏切ったのだ。国民の為に働いていたことが結果、国民を苦しめることになっていた。皮肉なことに、XX のメンバーは BrainVerse の立ち上げに関わっていたのである。その自責の念はいつまでたっても消える事はないのだろう。

アジト内にある自身の部屋で緊急評議会に出席していたカニングは、もう 1 人のギルドマスター kocha の部屋へと向かい声をかけた。

「ただいまー！ はあ、もう会議ってなんでこんなに疲れるんだろう。…あ、そうそう、緊急評議会の音声をリアルタイムで送っておいたけど、聞いてくれてた？」

「ええ。ありがとう。全て聞かせてもらったわ。でもカニング、あなた勝手に余所と同盟を結ぶだなんて他のメンバーに怒られるんじゃない？ ましてや Jokers でしょう？ あんなお子様の集団が役に立つの？」

「いやあそれがさ、Jokers のミットとかいう子が凄い面白かったんだよ！ 聞いてたでしょ？ …それに、あの子は助けてあげないと駄目だよ。たぶん放っておいたら IRL の BV POLICE でも殺して、BrainVerse に殺される」

「全く、優しいんだから。まあいいわ。それで私たちが Jokers と組むメリットはあるの？」

「それがあの子たち、どうやったのか BrainVerse に近い人間の脳チップデータをコピーしまくってるみたいなんだ。ほんと悪い事するよねー。で、僕たちが例のシークレットリカバリーフレーズで BrainVerse へログインした後、ログイン許可リストを改ざんする。Jokers 全員のウォレットアドレスをクリアにしておくと、あの子たちは盗んだ脳チップデータを使ってログインできるでしょ？ Jokers が全員来るかはわからないけど、それでも人数が多いから罔にはなってくれるんじゃないかな。それに彼らは、僕らが思っているより遥かに強いよ。…この作戦に参加してくれる Jokers は、もう子供じゃなくて立派な PUNKS だよ」

「カニングがそこまで言うなら反対はしないけど…。まあ私たちが欲しいのは情報だから、Wanted Teller とかでみんながわちゃわちゃしててくれた方が動きやすいわね」

XX が BrainVerse に侵入する真の目的は、他のギルドとは別の所にあった。

日本に院政を敷いているブレインバースは果たして、日本人による統治機構なのか。他国の影響下でないのか。人間による統治下にあるのか。…AI の管理下でないのか。

それらの答えが欲しかった。自らが加担してしまった「歴史上最悪の発明」だと形容さ

れてなおその盤石が崩れる兆しすらない BrainVerse。尽きる事のない懺悔の思いと溢れて止まる事を知らない知的好奇心の狭間で、BrainVerse の壊滅とその探求は XX の宿命となっていた。

「さーと、じゃあ僕は BrainVerse 侵入の準備をしようかな。これが僕にとって最期の任務になるかもしれないし」

その言葉の深刻さとは裏腹にカニングの表情は明るかった。

「こら。縁起でもない事を言わないの。私たちには BrainVerse 誕生に関わった責任があるんだから、もう少し活躍してから死になさい」

「えー、もう冗談きつんだから。…まあ大丈夫だよ。僕たち XX はこの程度の作戦でやられる事なんかないよ」

カニングは少年のように顔全体で笑いながら、BrainVerse 侵入に使用する DIVE ROOM に向かった。

彼を慕うギルドメンバーは多い。全員が、その穏やかな雰囲気と常に明るい表情に救われるのだ。

そしてカニングがギルドメンバー全員の心の支えになっている事を理解している kocha は、XX の為にカニングを特別に可愛がっている。

「まったく…。さて、私も準備しようかしら」

2 人にはまるで姉弟のような、温かな関係が構築されていた。